加賀能登の特産・伝統野菜（2）

石川県農業情報センター
主任農業専門技術員
今　井　周　一

5．ジネンジョ（森本じねんじょ長芋）

来　歴

約250年前，南森本町の武田弥右衛門（1859年没）によって，金沢の医王山（薬草の名山）から自然薯を持ち帰って自家の畑に栽培したところ自然薯にまさる立派なイモが採れたので，これに力を得て作り始めたと云われている。その後同町の篤農家によって太く，品質の良いものに改良を重ね，現在の森本川の流域の砂壌土に土着したものである。

写真7．森本じねんじょ長芋の生育風景

栽培の歴史

江戸，明治，大正，昭和，平成と現在の森本川流域の砂壌土に栽培されてきた。医王山の雪解水が集まって川をなし山間の緑を縫って流れ，森本町を縦貫し日本海にそそぐ森本川は古来，毎年春の氾濫で山奥の沃土が大量に堆積した。このあたりにのみ長いもが立派に育つことから付近一帯の人々よりこの地で栽培される長いもは，天恵の珍味とされてきた。しかし，この森本の長いもは市場にもスーパーにもない。ほとんどが予約販売制で，暮れの贈答品として求める場合が多いと云う。どうしても食べてみたい方は南森本の生産農家を訪ねるか，金沢市農協森本支所へ訪ねるかしないと手に入らない。そのうえ，河川の改修や近年住宅が建て込んで来たため栽培適地は著しく減少し，現在はその一部（南森本）を残すのみとなっている。

主な産地と旬

産地と収穫期：金沢市森本地区／11～12月
旬：秋冬

6．サツマイモ（五郎島のさつまいも）

来　歴

五郎島のさつまいも栽培の歴史は古く，元禄時代末期（1700年頃）に五郎島村肝煎大百姓の太郎右衛門が薩摩の国から種芋を持ち帰り，その栽培を伝授したのが始まりだと伝えられている。その後，明治，大正，昭和，平成へとサツマイモが栽培されてきた。サツマイモは早掘りとして形が良く色も美しく甘いと全国的に知られるようになり，昭和59年に「五郎島金時」と命名され，今日に至っている。

写真8．五郎島のさつまいも

栽培の歴史

サツマイモの栽培は，自らの手で開墾した砂丘畑へ明治10年に12ha余りを作付けしたのが産地化の走りとなり，以降，五郎島村全体に広がり栽培面積も増加してきた。昭和13年にはおおよそ112

トンの早堀りサツマイモが，京都，彦根，大阪，敦賀，神戸などの県外へ共同出荷され，市場から高い評価を得て栽培にも一層の熱が入ったと伝えられている。

昭和18年～22年の食糧難の時代には，1,000トンを超える供出割当を完納し，社会不安の救済に大きく貢献した。

昭和35～46年にかけて畑地かんがい事業，構造改善事業，港代替農地造成事業などの着手により畑地が整備され，生産量が倍増した。昭和52年にキュアリング貯蔵法の導入により腐敗いもの減少と周年出荷が可能となり，現在金沢北部砂丘地の主力野菜の一つとなっている。

一方，品種も変わっており，古くは「金時」（紅赤），昭和20年頃から多収穫品種の「茨城一号」が栽培され，続いて「農林４号」（昭和24年）が中心となった。その後，品質の良いものが消費者より好まれるようになり，高知県から「高系14号」を導入（昭和31年）し，昭和34年には「高系14号」に統一された。現在は，「高系14号」から選抜された鮮紅色の強い「コトブキ」（昭和53年導入）を主体に栽培している。その後，帯状粗皮症対策として昭和60年より茎頂培養のものが導入され，現在では主流になっている。

主な産地と旬

産地と収穫期：金沢市粟五地区／８月中旬～11月上旬

旬：初秋～晩秋

７．レンコン（小坂（こさか）蓮根・加賀蓮根）

来　歴

石川県でのレンコンの栽培は，藩政時代にさかのぼる。その伝藩経路は明らかではないが，ずいぶん古く加賀藩五代藩主前田綱紀のころから栽培されていたものと伝えられている。

レンコンが現在のように金沢近郊の特産野菜として陽の目を見るようになったのは，明治20年以降のことである。当時，小坂蓮根（レンコン）と呼ばれ，加賀特産物として取り上げられ，食用として栽培されるようになったと云われている。

現在の加賀蓮根の名は，大正中期，レンコンの生産拡大に功績のあった，本岡大吉氏によって命名されたものである。

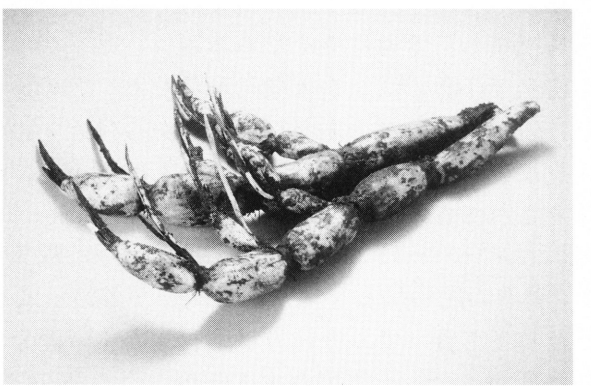
栽培の歴史

蓮の根を食用として利用されるようになったのは，京都との深い交流関係や加賀藩の豊かな財力とともに城中で栽培され，「ハスノ根」として上層武士間で食用（薬用）に供されていたといわれている。その後，金沢市大樋町一帯（小坂地区）で栽培されるようになり「大樋蓮根」と呼ばれ，加賀の国の産物（1861年）として公に栽培されるようになったといわれている。この大樋蓮根は，「地ばす」といわれる品種で地下１m前後を匍匐するため堀あげるのに極めて労力を必要とし，その収量も低く短小型であったが，明治中頃まで栽培が続いたとされている。

明治20年代になるとようやくレンコンの商品性が注目されだし，富農本岡三千治・太吉父子，精農表与兵衛等によって新品種の導入に力が注がれた。明治30年代の「青葉種」，明治40年代の「枯知らず」，「赤蓮種」などの導入がある。大正に入ると「白蓮種」，「南京種」，「赤蓮種」などがあり，これらを総称して加賀蓮根として市場へ出荷され

写真９．小坂蓮根の収穫風景

写真10．小坂蓮根



ていた。

昭和30年代の主な品種として，「備中種」，「支那蓮種」，「上総種」などがある。これまで様々な品種が導入されて改良が加えられてきた。昭和40年代中頃，支那蓮種から選抜育成してきたのが，現在の品種「支那白花」である。

このように，明治以来，大正，昭和，平成と金沢市小坂地区を中心に才田，森本地区，河北潟干拓地，隣接の津幡町まで加賀レンコンの栽培が広まり，一大産地となっている。

主な産地と旬

産地と収穫期：金沢市小坂・薬師谷・才田地区／8月下旬～3月下旬

県内他のレンコン産地：河北潟干拓地，津幡町，七尾市奥原／8月下旬～3月下旬

旬：秋～冬

8．ネギ（加賀しろねぎ・能登しろねぎ）

来　歴

「野菜種類・品種名考」のネギに，日本書紀（720）の仁賢天皇の6年（493）の項に秋葱（あきねぎ）の語があり，平安時代には主要な野菜の一つであった。また享保20年（1735）の諸国産物帳に，ネギは全国各地に栽培されていると書かれている。本県の来歴は不明であるが，「耕稼春秋」（宝永4年1707）に金沢の近郊の広岡村（現金沢市広岡町）と長田村（現金沢市長田本町）に多く作付けていると書かれている。また当時はネギのことを「ねふか」と呼ばれていたことも書かれている。

栽培の歴史

石川県統計書で明治41年以前の資料はないが，41年で45ha，大正4年108haと栽培面積が拡大し，栽培地も石川郡（現の金沢市の一部と松任市を含む），能美郡，金沢市を中心として県下に広く栽培が普及した。特に「石川県園芸要鑑」（大正5年）には，明治後期から大正始めにかけて能美郡根上町赤井のネギは有名であったと書かれている。その後さらに面積は拡大し，昭和39年，270haに達した。しかし，その後宅地化などにより減少し，平成7年で27haとなった。

写真11．深ネギの生育風景

主な産地と旬

産地と収穫期：能美小松，松任市，金沢市，羽咋市，志賀町，富来町，七尾市，鹿島町，鳥屋町，鹿西町，田鶴浜町，中島町，能登島町

春まき秋どり　：8月中旬～9月下旬

春まき秋冬どり：9月下旬～11月下旬

秋まき夏どり　：7月上旬～8月下旬

旬：秋冬

9．タケノコ（金沢の筍）

来　歴

県内に初めて孟宗竹（モウソウチク）が植栽されたのは，加賀藩の割場足軽付けだった岡本右太夫が，明和3年（1766年）に江戸から2株の孟宗竹を持ち帰り，金沢の桜木町自宅に植えたのが始まりである。しかし，この孟宗竹は惜しくも枯れたので，4年後の明和7年（1770年）に再び江戸から取り寄せ，自宅と菩提寺である寺町の妙福寺

写真12．金沢の筍

に植えたところ。今度は根付いた。その後，内田孫三郎氏が孟宗竹の普及に努めたと伝えられている。

栽培の歴史

この孟宗竹は安永年間（1772～1780年）に金沢市金城地区（泉野，十一屋）に広がり，さらに内川の向田吉右衛門が分譲してもらって産地化の礎を築いたとされている。

富樫地区では，それより遅れて明治初期に当時窪村の大西孫次郎が野村から親竹を移植した。また，明治37年には地黄煎町（現在泉が丘２丁目）の千代栄次郎氏が金沢市窪に移植した。その後，大正～昭和の中頃まで富樫，内川地区一帯の山間地で次第に植栽されるとともに，全国に先駆けてたけのこ振興策を進めてきた。昭和２年に，富樫地区に，昭和８年に内川地区に筍缶詰工場を建設している。また，昭和38年にタケノコ畑地造成事業と近代的な筍缶詰工場が建設された。一方，昭和34年に農協による共販体制を再編し，集荷調整を行いながら販売の合理化を図っている。

品種の特性

マダケ属の一種でタケ類の中で最も大きい。稈の高さ10～20m，径25cmにもなる。地下茎は深さ60cmの範囲に波状に伸長する。ひげ根は地表近くに分布し，養分を吸収して地下茎に貯える。地下茎から芽子が発生し，翌年にはタケノコまたは地下茎となる。タケノコの生産力の最も旺盛な地下茎は，２年生から５～６年生までの地下茎である。

栽培の特徴

タケノコの肥培管理として大切なことは，施肥と親竹更新にある。施肥には春肥施用と夏肥施用があり，春肥は発筍の１ヶ月前に，夏肥は地下茎の生長とタケノコの増収のために芽子が伸長し始める前に施用する。

親竹の更新は，親竹の伐採竹齢は６年とし，毎年50～60本の古竹を更新し，10ａ当たり300本の親竹を確保するようにする。

主な産地と旬

産地と収穫期：金沢市額，富樫，内川，金城地区／４月下旬～５月中旬

県内の他タケノコ産地：小松市，鶴来町，津幡町，門前町／４月下旬～５月中旬

旬：春

10. トウガラシ（蕃椒）

来　歴

県下には剣崎ナンバ（松任市）と下山田ナンバ（宇ノ気町）がある。いずれも来歴は不明だが，栽培の歴史は古い。剣崎ナンバは，「皇国地誌」（明治９年）によると現在の松任市剣崎に蕃椒（ばんしょう＝トウガラシ）が栽培されていたと書かれている。一方，宇ノ気町町史を引用すると，下山田ナンバは「加能越三州地理志稿　巻五河北郡」に蕃椒，上下山田二邑作之と書かれている。おそらく両地区とも藩政時代から栽培されていたものと思われる。

（１）剣崎ナンバ

栽培の歴史

剣崎ナンバの本格的な栽培は，明治から昭和30年頃までで松任市剣崎町を中心に畑や水田に多く栽培されてきたが，その後姿を消し，剣崎町だけに土手や菜園の片隅で細々と自家用として栽培されてきた。しかし，平成５年にJA松任市が転作作物の掘り起こし作戦として１支所１特産品運動を展開。また，林中支所の青壮年部は，剣崎ナンバを観賞用の鉢植えに仕立て販売している。

品種の特性

松任市剣崎町でずっと栽培されている「剣崎ナンバ」は，おそらく藩政時代から変わらない在来品種である。草丈１m前後，果実の長さが12～15cm位で細長い。真っ赤に熟れたナンバは，全国でも一番の激辛として地元種苗会社も太鼓判を押すほどの逸品である。

写真13. 蕃椒の生育風景

写真14. 蓄椒

（現在，種子は「剣崎辛長」で市販されている。）

（2） 下山田ナンバ

栽培の歴史

藩政時代から栽培され，特に七塚の漁場を近くに持つ山田としては「こんかいわし」の香辛料として大量に出荷していた。また，どこの家庭にも欠くことの出来ない香辛料として需要があり，ざるにかついで町内はもちろん遠く高松町方面までも売りに行き，大切な換金作物となっていた。しかし，昭和30年代以降イワシの不漁が続き，需要も急激に落ち，現在では家庭菜園として細々と栽培されている。

品種の特性

「下山田ナンバ」は「剣崎ナンバ」に比べると太く，辛くて甘い下山田ナンバとして長年，好まれてきた。

草丈70cm前後，果実の長さが13～15cm位で細長い。

主な産地と収穫期

松任市剣崎町／8月中旬～10月下旬

宇ノ気町下山田／8月中旬～10月下旬

このように，加賀能登では藩政時代から季節感に富んだ野菜が栽培され，豊かな食文化を支えてきた。春は芽のもの，夏は葉のもの，秋は実のもの，そして冬は根のものというように季節に応じた野菜が栽培されていた。特に城下町金沢や人口の密集している近郊農村においては，町民の需要に応じた多種類の野菜が生産されていた。